

国文学科「マス目のなかの物語」

レポート
第2回

2014.
10.18
[sat]

常磐祭初日、作家・出久根達郎氏をお招きし、講演会を行いました。氏は下町の古書店を舞台にした『佃島ふたり書房』で第108回直木賞（1992年下半年）を受賞。長年古書店経営に携わってこられた経験もお持ちです。古書にまつわる裏話や、作家の肉筆に触れる楽しさなどについて、多彩なエピソードを交えてお話していただきました。回の最後には、活発に質疑応答が行われました。

進行：栗原 敦氏 実践女子大学 文学部 国文学科 教授



作家の値段

とても高額だったり、ワンコインで買える金額だったり。「どうしてこの値段なの？」と古書の値段に疑問を感じたことはないでしょうか。値付けの流れや古書店の隠れた使命、値段に潜むドラマについて、古書店主ならではの興味深いお話を久根氏が披露してくださいました。



講師：出久根 達郎氏 作家、第108回直木賞受賞

■古書店はどんな基準で本に値段を付けるか

よく、「古書店ではどのような基準で本に値段を付けるのか」と質問されます。近年チェーン展開している古書店は本の定価を基準にしていますが、江戸時代から明治・大正期、太平洋戦争前などの古書を扱う古書店の基準は異なります。こうした古書店では、値付けをする人間は先達から教わったり、自分で本や作家の価値を学び、また他店の状況も参考にして、独自の基準を確立しています。お客さまから「この値段は適正ですか？」と訊ねられた時に自信を持って「はい」と答えられる値段を、我々古書店の人間は付けられなければなりません。

古書店の人間は、幅広い知識を持っていないと自信を持って値付けをすることはできません。そのためさまざまな本や作家について、一般の方々とは異なる、独特の視点を持っています。



■値付けの流れ～『国訳妙法蓮華経』を例に

それではある本を例に、値付けの流れをご紹介します。ここに『国訳妙法蓮華経』という題の、お経が書かれている仏教書があります。

まず奥付を確認します。ここには本の素性が記されています。この本の場合、発行は昭和9年6月5日、岩手県の所在地と「宮沢清六」という発行者名が記載されています。古書店の人間はこれだけでピンと来ます。次に、最後のページを見ます。ここには、詩人・宮沢賢治の遺言が書かれています。

つまりこの本は、賢治の弟・清六さんが、賢治の遺言を受けてつくったものです。実際には1,000部作成され、知友の方々に配布されました。内容は賢治の作品ではありませんが、この本は彼の誠実な生き方の証とも言えるものです。古書店の人間はそうした本の価値を踏まえて値付けをします。この本の具体的な値段はここで申しませんが、とても高価であることはご紹介したいと思います。

■古書店が担う、もう一つの役割

古書店には、埋もれた才能を発掘し世の中に知らせるという使命もあります。宮沢賢治の名が知られるようになった裏には古書店の存在があります。賢治は生前、童話集『注文の多い料理店』と、詩集『春と修羅』を出版していますが、どちらも発行1,000部と部数は少なく、またそれほど売れなかったため、現存数が非常に限られています。この2冊は現在、古書店で高額で扱われています。

古書店の人間が本に値を付けるのはとても大切なことです。古書店の人間が、「内容に価値がない」と捨ててしまえばその本はそこで死んでしまいます。しかし、100円を付ければお客さまが気軽に買ってくださるでしょうし、高額な値を付ければその本がお客さまのもとに行っても捨てられることはないでしょう。古書店の人間は、100年200年と生き続けてほしい本には高い値を付けます。古書店の値付けにはそんな意味合いもあります。

■値段は、古書店の研究成果

ところで現在、実践女子大学でとても貴重な物が展示されています。梶井基次郎の草稿です。梶井のものが市場に出回ることとはほとんどなく、この発見は古書業界でも100年に1度あるかどうかの大事業だと思います。この草稿を見ることで梶井がどれだけ文章の推敲を行ったかも確認できます。

私自身の発見経験としては、作家や詩人、歌人や劇作家として多彩を誇った寺山修司にまつわる記憶があります。彼は昭和58年5月4日に亡くなりましたが、私は当時、高円寺で古書店を営んでいました。その日、「本を買ってほしい」と依頼があって出かけていき、お客さまから段ボール1箱分ほどの本を買いました。帰りがけ、同人誌が放り出しているのに気がつき中を見ると、寺山の名があった。それは早稲田大学学生の同人誌だったのです。これをどうするのかお聞きすると「捨てる」ということでしたので購入しました。そして店に帰る途中、病院の前を通ったら人だかりがしている。近くの方に何があったのか訊ねると、「先ほど、ここで寺山修司が亡くなった」とのことで、不思議な縁を感じました。この同人誌は良い値で扱いました。

寺山は最近ブームになっており、古書店が直筆原稿を高額で、また著書や劇作品の台本、映画のチラシなども扱っています。こうした物を集めるのもまた楽しいものです。その作家の名前が記されている物を欲しいと思う、そういう気持ちも作家を愛おしみ、その名を育てることにつながります。文学研究には真面目に論文を書くばかりではなく、そういった「遊び」の部分もあっていいと思います。古書店の人間の研究成果は、論文ではなく値段です。私たちは調べたことを値付けに反映しながら、そこまでのプロセスも楽しんでいきます。

■値段の裏にドラマが潜む

石川啄木の日記に、煙草代に困って古本屋に本を売りに行く一節があります。北原白秋などからもらったものの中に、『あこがれ』という題の自分の詩集を数冊混ぜて持っていくと、古本屋の親父がそれに1冊5銭の値を付けました。『あこがれ』の定価は50銭でしたから、啄木はその値段が本意だったようです。

しかし私は、その古本屋を大したものだと思います。当時、啄木

はまったくの無名です。同じ本が数冊あったことから、古本屋の親父は売りに来た彼が作者だと気付いたのでしょう。それで義侠心で値を付けた。同じ古本屋の私からすれば、とてもではありませんが無名の詩人の詩集を、お金を出して買い取るなんてことは考えられません。

今、『あこがれ』には100万円近い値が付いています。古書の値段には、このようなドラマが隠れています。皆さまも本を読みながら、ぜひその点に想いを巡らせていただければ、と思います。



【質疑応答】

【来場者】 作家と装丁家との関わりはどのようになっていますか？

【出久根氏】 売れっ子の作家であれば装丁にも要望が言えます(笑)。私の場合は編集者にお任せしますが、私の担当をされる方は古書や本を愛する方が多く、まず間違いのない仕上がりになっています。

【来場者】 以前、集団就職で上京された方々と関わりがあり、その時の話を本にしました。先生も集団就職を経験されたとのこと、読んでいただけないでしょうか。

【出久根氏】 集団就職について本を書こうと調べたことがあるのですが、国もまとまった統計を出しておらず、研究もあまりされていないようです。ぜひ拝読させていただきます。

【来場者】 先生は現在、筑摩書房のPR誌で本荘幽蘭について連載をされていますが、この作品を書かれたきっかけを教えてください。

【出久根氏】 本荘幽蘭は一般には知られていませんが、女優や新聞記者、カフェ経営と職を転々とし、いろいろな文献に登場するため、古書愛好家に親しまれている女性です。私は、彼女が国歌大観の編集にも携わったことから興味を持ち、その正体を追究したいと考えて小説に取り上げました。

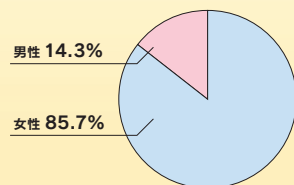
【公開講座アンケートより】

「興味深い話だった」「作品に触れる際の気持ちに変化が生じた」などの声が寄せられました。

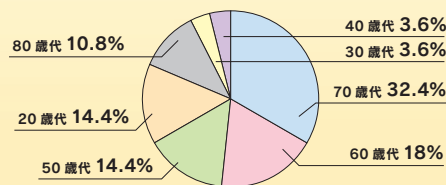
【寄せられた声】

- 古書にあまり興味がなかったが、面白いお話や見方などを伺い、古書祭りにも行ってみたいと思った。(30歳代/女性/渋谷区在住者)
- 古書店が理もれた作家の発掘に寄与してきたという話が大変興味深かった。(60歳代/男性/その他)
- 古本屋さんの立場からの話を初めて伺い、作家や作品を読む際の気持ちに変化が起きた(70歳代/女性/その他)

〈性別〉



〈年齢〉



〈属性〉

